

授業改革と学び合う学級づくりが生徒の学校生活に与える効果の研究

齋藤まゆみ* 遠見 繁也** 伊藤 大輔*** 磯部 征尊****

*新潟市立東新潟中学校 **新潟市立大形中学校

秋田県立大学総合科学教育研究センター *愛知教育大学技術教育講座

Study of the effect on students' school lives through teaching improvement by teachers
and class management by students

*Mayumi Saito **Shigeya Emmi ***Daisuke Itoh ****Masataka Isobe

Higashi Niigata Junior High School in Niigata City*

Ogata Junior High School in Niigata City**

Research and Education Center for Comprehensive Science, Akita Prefectural University***

Department of Technology Education, Aichi University of Education****

キーワード：授業改革 学級力向上プロジェクト 学校適応感

Keywords: Teaching improvement Class management Students' adaptation for school lives

<要約>

本研究は、教師の授業改革と生徒主体の学級づくりによる、よりよい学校生活の創造を実証的に示したものである。「新潟市が目指す授業づくり」に則った授業改革と、学級力向上プロジェクトを行った結果を、学校評価アンケートと学校環境適応感尺度（アセス）を用いて検証した。学校評価アンケートでは、教師も生徒も肯定的評価の割合が年度を追って高くなった。アセスでは、対象とした5つの因子全てにおいて有意、または有意傾向が示された。更なる成果として、保護者の学校に対する意識の変容といじめ認知件数の減少が挙げられた。教師と生徒とが一体になった学校づくりの有効性が多面的に実証されたと言える。一方で、不登校支援や全校体制で行う持続性の確保が検討されるべき課題として残された。

I 主題設定の理由

新潟市教育委員会は、「新潟市の学校教育（平成29年度～31年度）」において、「組織的な取組による授業力の向上」と「自律性と社会性を育む生徒指導の推進」を重点に掲げている⁽¹⁾。また、「授業づくりと生徒指導の一体化を目指して」と題し、好ましい教師の働きかけを示しながら授業づくりと生徒指導の融合を推進している。これらを受けて、対象校では、平成29年度より研究主題を「生徒と一体となって創る学習課題の工夫～学級マネジメント力を育てることを通して～」として、教師の授業改革と学び合う学級づくりの2点に重点を置いて、課題解決のための方策を実践することとなった。

対象校は、学習においては、授業規律は改善されつつあるものの、全国学力調査では対象の教科全てにおいて全国平均値を下回り、更なる工夫が必要とされた。また、学習そのものに対する必要感や意欲を持ってない生徒への働きかけについても方策を練る必要があった。

生活においては、特に人間関係づくりにおいて、対人関係が広がりにくい様子があった。更に、人間関係のこじれを自力で修復することが困難で、支援する集団の力も弱く、長期化する傾向にあった。

そこで、本研究では、上記の研究主題の実践により、学習そのものに対する必要感や意欲をもたせ、対人関係が広がる望ましい姿を検証していくこととする。

II 研究仮説

授業改革と学び合う学級づくりを通して、生徒は自律性・社会性を身につけ、よりよい学校生活を送ることができるだろう。

本研究における「自律性」とは、「めあてを持ち 自己決定し 自主的に行動する」姿を指し、「社会性」とは、「互いに認め合い 支え合い 高め合う」姿を指す⁽¹⁾。

Ⅲ 研究の構想と実際

1 研究の検証方法

学校生活の様々な場面の内、特に次の2つの結果を用いて検証する。

(1) 学校評価アンケート

平成29年度から令和元年度までの学校評価アンケートの結果を対象とし、「肯定的評価」の割合の変化を検証した。「肯定的評価」とは、「4 あてはまる」と「3 ややあてはまる」を合わせた割合を指す。

(2) 学校環境適応感尺度

栗原・井上(2010)は、「学校適応感」について、「個人と環境の主観的な関係」であり、「適応感」は個人の主観であるため、適応とは一致しないこともありうる」と述べている⁽²⁾。「適応感が低い」ことを「生徒からのSOSの発信」と捉え、教師の観察や他のデータ、情報等から得られた指標に、「本人が感じているSOSの度合い」も加えることで、よりの確かな支援策を構築することが可能になる。また、同氏らは、「学校適応感」の測定尺度として、「アセス (ASSESS: Adaptation Scale for School Environment on Six Spheres)」を開発した。アセスでは、学校適応感を6側面(6因子)から測定する(表1)。

表1 アセス因子の説明

因子名	測定するもの
生活満足感	生活全体に対して満足や楽しさを感じている程度
教師サポート	担任(教師)との関係が良好であると感している程度
友人サポート	友人関係が良好であると感している程度
向社会的スキル	友だちへの援助や関係を作るスキルがあると感している程度
非侵害的関係	無視やいじわるなど、拒否的・否定的な友だち関係がないと感している程度
学習的適応	学習方法がわかり、意欲も高いなど、学習が良好だと感している程度

本研究において対象としたアセス因子は、「教師サポート」・「友人サポート」・「向社会的スキル」・「非侵害的関係」・「学習的適応」の5つとした。「生活満足感」は学校生活以外の場、例えば家庭や校外での活動、における適応感も含有するため、本研究における分析対象には含めなかった。

2 研究の実際

(1) 授業改革について

① 「3つのフレームワーク」の活用

「新潟市が目指す授業づくり」に則り、「学習課題」・「まとめ」・「振り返り」のある授業を実現するため、全教室共通の掲示プレートを作成・配布し、全教科で授業の流れを一元化した。また、年に1回、校内授業研究を行って互いの実践について協議し、その後の実践に生かした。

② 学習課題の質的向上

生徒が抱くであろう「これから何を学ぶのか」「何を学んでいるのか」という疑問について、生徒と教師の対話から必要感や困り感を湧き出させ、学習課題に対する能動性と主体性を引き出すことを重視した。

(2) 学び合う学級づくりについて

授業改革が成功するための一つの鍵となる「対話」を実現するには、学級に支持的風土が醸成されていることが肝要である。その実現のために、教師と生徒・生徒と生徒との信頼関係を基盤にした学級づくりが必要とされ、学級力向上プロジェクトの導入に至った。

① 学級力について

「学級力」とは、早稲田大学教授・田中博之氏が提案した、学級を分析的に見るための指標のことである。新潟大学教育学部附属新潟小学校(2010)は、学級力の取組を通して、「子どもと担任とが学級の状況を統一された多面的な観点で評価する」と述べている⁽³⁾。生徒が自分たちの学級を評価・分析し、改善策を話し合い、実行する。この一連の流れにより、生徒同士の対話が促進され、子どもの学級に対する所属意識を高め、担任の学級経営力を向上させることが期待できる⁽³⁾。

② 学級力向上プロジェクト実践の具体

学級力アンケートの結果をレーダーチャートで視覚化し、それを基に「学級力会議」を行う。その会議で決まった具体的方策を「スマイルプロジェクト」として実践する。対象校では、随時振り返りを行い、次のプロジェクトに生かす、という R-PDCA サイクルで学級力の向上を図る。毎年度、1回目を6月に、2回目を9月に、3回目を2月に行うことを基本としている。

IV 研究の結果と考察

1 授業改革について

表2より、年度を追うごとに、教職員が一丸となって研究主題に基づいた授業を行ったことが分かる。生徒との信頼関係も考慮しながら、「3つのフレームワーク」を活用して授業改革に努めていたことが明らかになった（表2①②）。平成29年度における「①研究主題に基づき、『学習課題』と『振り返り』の工夫に努め、授業力向上を目指した」について、平均値は82%であるが、内訳としては前期68%・後期96%と、前期と後期で大きな変化が見られた。また、信頼関係に基づいたサポート的立場で取り組む態度は、生徒に安心感を与え、学習に対する情意的側面にもよい影響を与えると考える（表2③）。

表2 授業改革①（教職員の結果:%）

質問項目	H29	H30	R1
①研究主題に基づき、「学習課題」と「振り返り」の工夫に努め、授業力向上を目指した	82	93	91
②生徒との信頼関係の構築に努め、教育活動においてはサポート的立場で取り組んでいる	96	95	98
③生徒自らが自己の課題を解決しようとする意欲や方策が見いだせるような支援をしている	72	86	91

このような結果を生んだ背景には、年度を通じた継続的な校内研修の実践があると考えられる。外部講師を招き、専門的知見と実践のフィードバックを適時に得ることができた。合計5回に及ぶ校内研修を通して教師同士の対話が増え、具体的方法は個性を生かしつつ、学級集団づくりにおける学校としての方向性が定まっていたと言える。また、担任・級外問わず全員が参加することにも大きな意味があったと言えよう。研修で得られた知見や発見が、教師間の「共通言語」として日常的に話題に上がった。さらに、対話を通して理論や概念が実態に見合うよう練り上げられ、実態に即した方策として生徒に還元されるサイクルが出来た。教師全員で生徒を育てる、という学校風土が醸成されたと言える。

表3 授業改革②（生徒の結果:%）

質問項目	H29	H30	R1
①普段の授業では学習課題が示されています	93	96	97
②普段の授業では授業の終末に学習内容を振り返る活動（まとめ）を行っています	82	94	97
③普段の授業では友達同士で話し合う活動を行っています	70	88	93
④授業で、ペアやグループで話し合う活動は好きです	62	76	81

表3より、教師の努力や工夫が生徒に確かに伝わっていることが明らかになった。全校で共通した掲示プレートを用いたことは、授業の流れについての安定感を生むと共に、生徒一人ひとりが見通しをもって授業に臨むことができた（表3①②）。生徒は、授業の見通しが立つことで能動性が喚起され、主体的に授業に参加できるようになったと考える。また、教師との信頼関係は、教室で授業に参加すること自体の安心感を提供したと推察される（表3③④）。

実際に、生徒同士の話し合い活動は、回を重ねるほどにスムーズな流れで、活発な話し合いが行われるようになった。ペアやグループの中で、生徒が正誤問わず自分の意見や思いを他者に述べる姿、また、受容的に聞き取り、進んで理解しようとする姿が自然な光景として見られるようになった。

2 学び合う学級づくりについて

(1) 学校評価アンケートの結果

表4 学び合う学級づくり①
(教職員の結果:%)

質問項目	H30	R1
学級力向上プロジェクトを通して、生徒が主体的によりよいクラスにしようとする姿の育成を行った(担任のみ)	91	89

表4より、担任の9割が主体的によりよいクラスにしようとする姿の育成を行ったと回答した。学級力向上プロジェクトは、特別活動部を中心に着実に実践された。どの教室にもレーダーチャートが掲示され、学級力会議の痕跡やスマイルプロジェクトも掲示され、生徒が自分のクラスをよくするために思考を巡らせ、話し合い、実践していることが授業担当者にも伝わってきた。また、そのような掲示物をきっかけに、生徒は多くの教師とクラスの悩みを相談し合ったり、より良い方法を尋ねたりするなど、自分たちのクラスをよりよくするための示唆を得ていた。表5は、生徒の自律性と社会性の伸長に関する項目の結果である。全項目において、肯定的評価の割合が上昇している。目的意識をもって、自分の行動を自覚しながら学校生活を送る生徒が増えた(表5①)。また、自分に自信をもって楽しく学校生活を送る生徒も増えた(表5②③)。さらに、生徒同士の信頼関係も着実に築かれていることが明らかになった(表5⑤⑥⑦)。学級力向上プロジェクトは、「自分たちの学級」という一つのテーマについて話し合い、方策の実行を繰り返す実践である。学級力会議において話し合う機会を複数持つことで、参加者の自己開示を促し、自然に交流と対話が増え、相

互理解に基づく相互互助的な人間関係が形成されたと言える。生徒の自律性と社会性の成長を特に強く感じた場面は、全校集会における姿である。規律正しい姿勢で座るだけではなく、話者にしっかりと耳を傾ける姿が多く見られるようになった。平成30年度末には、道徳の教科化に伴い「全校道徳」を行った。どの学年でも与えられた課題について、即興のグループで活発に意見を交わす姿が見られた。また、そこで出た意見や自分の考えを全校生徒の前で発表する生徒もいた。これは、生徒同士の信頼関係に由来する安心感があるからこそできたことである。その背景には、友達のことを考えたり、自分の言動に気を付けたりするという他者視点の取得ができている生徒が増えたことが推察される(表5⑤⑥)。このような変容から、生徒は自律性と社会性を身に付け、伸長させたにとらえることができる。

表5 学び合う学級づくり②
(生徒の結果:%)

質問項目	H29	H30	R1
①学習や生活のめあてをもって、毎日を過ごしています	50	59	65
②自分にはよいところがあります	61	68	73
③学校生活は楽しいです	80	85	90
④やっていることを先生や友達に認められてうれしいと感じることがよくあります	77	82	90
⑤友達のよい所を見付けたり、友達が落ち込んでいる時、励ましたりしています	80	86	90
⑥からかったり、ばかにしたりしないよう自分の言葉や行動に気を付けています	86	88	91
⑦学級活動、生徒会活動、行事等で、自分の役割を自覚し協力して取り組んでいます	86	90	93

2 学校環境適応感尺度の結果

学び合う学級づくり（以下、学級力向上プロジェクト）を実践する前の生徒（平成27年度入学生）と、実践した生徒（平成29年度入学生）を対象とし、2学年時・3学年時における平均値の変化で検証した（表6）。

表6 アセスの結果（2学年時）

因子	H27度		H29度		t値
	n=257	n=289	n=257	n=289	
教師サポート	平均	3.854	4.191		4.9 **
	標準偏差	0.875	0.706		
友人サポート	平均	3.737	4.128		5.2 **
	標準偏差	0.954	0.781		
向社会的スキル	平均	3.574	3.976		6.2 **
	標準偏差	0.815	0.678		
非侵害的関係	平均	1.858	1.683		2.4 *
	標準偏差	0.890	0.763		
学習的適応	平均	2.897	3.055		2.0
	標準偏差	0.966	0.924		

** $p<.01$

* $p<.05$

それぞれのアセスの平均値を因子別に算出し、平均値の差が有意かどうかを検証した。分析方法は、「統計分析ソフトHAD」でt検定（ウェルチのt検定）を行った⁽⁴⁾。2学年時のアセスでは、対象とした5つの因子全てにおいて、H29年度生の平均得点が有意に高かった。なお、「非侵害的関係」因子は逆転項目のため、得点が低い方が「否定的・拒否的な友達関係がない」とより強く感じていることを示している⁽⁵⁾。

表7 アセスの結果（3学年時）

因子	H27度		H29度		t値
	n=396	n=401	n=396	n=401	
教師サポート	平均	3.622	4.242		10.4 **
	標準偏差	0.980	0.685		
友人サポート	平均	3.675	4.016		5.3 **
	標準偏差	1.021	0.794		
向社会的スキル	平均	3.542	3.908		6.6 **
	標準偏差	0.875	0.665		
非侵害的関係	平均	1.952	1.631		5.3 **
	標準偏差	0.964	0.728		
学習的適応	平均	2.931	3.144		3.1 **
	標準偏差	1.000	0.929		

** $p<.01$

* $p<.05$

表7より、3年時のアセスでは、対象とした「教師サポート」・「友人サポート」・「向社会的スキル」・「非侵害的関係」の四つの因子において、H29年度生の平均得点が有意に高かった。「学習的適応」因子については、 $t(544)=2.0$ 、 $p=.51$ で有意傾向が示された（ $p<.10$ ）。以上の結果から、学級力向上プロジェクトが生徒の学校適応感において有意にプラスの作用を及ぼしたと言える。学校適応感について、AISES公益社団法人学校教育開発研究所によれば、「子どもの問題行動等を予防する、という意味では子どもの『学校適応感』が良好である事が大事です。なぜなら、『自分は学校でうまくやれている』と思っている子どもは、学校で問題を起こしにくいからです。友だちが好き、先生が好き、勉強が好き、こんな子は学校で問題を起こす可能性は低いでしょう。子どもの『学校適応感』を良好にすることが、予防的・開発的生徒指導には効果的です。」と述べている⁽⁶⁾。従って、本研究における実践のように、信頼関係を基盤に肯定的な相互交流の機会を意図的

に設定することは、生徒の学校適応感にもプラスに働くことが裏付けられた。学級力向上プロジェクトは、教師や友人との関わりを通して、学級の中で個人の成長を図る取り組みだと言える。続いて、有意差が見られた因子で2学年時と3学年時の平均得点の差を算出した結果を示す(表8)。

表8 各因子における平均の差

因子	2学年時	3学年時
教師サポート	0.6	0.3
友人サポート	0.3	0.4
向社会的スキル	0.4	0.4
非侵害的關係	-0.3	-0.2
学習的適応	0.2	—

表8より、2学年時における教師サポートの平均得点の差が0.6と、他の差よりも大きいことがわかる。教師サポートの質問項目は、以下の通りである。

- 担任の先生は困ったときに助けてくれる
- 担任の先生は信頼できる
- 担任の先生は、私のことをわかっている
- 担任の先生は、私のいいところを認めてくれている
- 担任の先生は、私のことを気にしてくれている

教師(担任)との関係性が良好になることは、生徒指導における基盤が整っていることを意味する。また、2学年時というタイミングで良好な関係を築くことができれば、その後の学校生活に良い影響を及ぼすことは明らかである。このように、信頼関係を基盤に、生徒は自律性、社会性を身に付け、よりよい学校生活を送っていると言える。

加藤・大久保(2009)は、生徒指導における教師と生徒との関係性について、「教師との関係が良くなることで生徒の指導に対するとらえ方やそれに対する意識が変化し、関係が良くない時には不公平にみえた指導がそれほど不公平には見えなくなる可能性があるという可能

性」を述べている⁽⁷⁾。さらに、「生徒指導に関しては、‘どういう内容の指導を行っているのか’ということだけでなく、‘どういう関係の中でその指導を行っているのか’ということが問われなければならないだろう」とも述べ、生徒指導における教師と生徒の関係性の重要性を述べている⁽⁷⁾。河村(2007)は、自身の調査結果の分析から「子どもの不適応の問題、いじめの問題、そして学力に及ぶまで、本人の問題だけでなく、環境要因である学級集団との関係性が大きいということが浮き彫りになりました。学級集団育成の重要性が改めて問われる結果となったのです。」と述べ、学級集団が個人の成長に与える影響の大きさに触れている⁽⁸⁾。本研究の結果においても、生徒は教師や学級集団における関わりの中で自己の自律性や社会性を伸ばさせ、よりよい学校生活につながっていることが明らかとなった。

V 研究の成果と課題

1 研究の成果

(1) 教師・生徒・保護者の意識の変容

学校評価アンケートの結果から、授業改革と学級力向上プロジェクトの重要性を教職員が認識していることが明らかになった。一人ひとりの向上心から来る熱意と、共通の目的に向かって一緒に研修し、協力し合いながら育んできた同僚性や協働性は、教職員集団のありようと共に、今後の生徒へ向けられる指導の中にも、「チーム学校」として確実に生きてくるだろう。生徒についても、学校評価アンケートとアセスの結果から、教師との信頼関係を基盤に、自己を伸ばさせながら仲間と共によりよい学校生活を送っていることが示された。このような様子は、子どもの姿を通して保護者にも伝わっている可能性が高いことが判明した(表9)。

表9より、年度を追って、肯定的評価の割合が増えた。教師が生徒との信頼関係を大切にし、その声が保護者に届くことで、保護者は学校の様子を知ると共に、教師への信頼を置くようになってきていると考えられる。

表9 学校評価アンケート（保護者の結果:%）

質問項目	H29	H30	R1
①学校は明るく活気がある	70	74	81
②子どもは、学校生活を楽しいと感じている	76	82	84
③子どもは、自分（子ども自身）のことが好きだと感じている	71	73	75

(2) いじめ認知件数の減少

表10 いじめ認知件数の推移（件）

H27	H28	H29	H30	R1
118	98	54	38	32

対象校における過去数年のいじめ認知件数は、表10の通りである。授業改革と学級力向上プロジェクトの実践が始まったのは平成29年度からである。平成27年度からの減少と、平成29年度からの減少の背景は異なる。平成28年度は、一時的に教育相談の方法を変更した。当時は暴力行為や器物損壊等の問題行動に加え、いじめの対応にも追われる中で、教育相談のあり方について見直しが必要であったためである。その結果、全教職員で「教師と生徒の信頼関係」の構築を主眼にした教育相談を行うこととなった。信頼関係づくりに効果はあったものの、かける労力は甚大であった。そこで、平成29年度以降は、例年通りの教育相談に戻した。それでもなお、いじめ認知件数は減少し続けている。この背景には、授業改革と学級力向上プロジェクトで培われた信頼関係と学級集団としての成長、生徒個人の自律性、社会性の伸長によるものと考えられる。

いじめの予防について、河村(2007)は、「いじめ防止を踏まえた集団育成という点では、いじめのない学校・学級には、集団のストレスが少ないことに着目すべきだ」と述べている。また、学級内で子どもたちがストレスをもちやすい状況として、①教師との関係、②学業の問題、③友達との関係、④学級集団との関係、⑤学級生活の単調さの問題、の5点を挙げている⁽⁸⁾。本実践においては、①教師との関係、③友達との関係、④学級集団との関係、の3点

において良好な環境が整ったと考えられる。学級という集団生活におけるストレスが軽減され、その結果としていじめ認知件数が減少に転じたと推察する。また、いじめが少ない状況では、生徒は安心・安全な環境の中で自分らしく伸び伸びと活動に勤しむことができ、それが自己肯定感の向上や学校生活の楽しさにつながることは明白である。

2 今後の課題

(1) 不適応・不登校の支援

多くの生徒がよりよい学校生活を送ることができている一方、不適応を起こし、教室に行きづらくなったり、学校を休みがちになったりする生徒もいる。対象校における不登校発生率は、平成29年度から3.7%のままである。発生率を減少させるためには、全生徒を対象とした本実践と並行して二次的・三次的な支援の方策も検討されなければならないだろう。

(2) 持続性の確保

本実践は、全校で共通して行ったからこそ成果が大きく表れたと考える。今後は、本実践を授業運営と学級運営の柱として位置付けることが望まれる。また、人事異動による教職員の変更に伴い、全校一丸となって取り組む姿勢を大切にすることが、カリキュラム・マネジメントの大事な視点である。今後も、教員一丸となってよい実践をいかに継続的なものにするかを検討していく必要がある。その際、本実践を運営するリーダー的立場の教職員の育成が喫緊の課題である。

謝辞

新潟市立大形中学校の教職員の皆様並びに生徒の皆様に心より御礼申し上げます。

<注及び引用・参考文献・参考URL>

- (1) 新潟市教育委員会 『新潟市の学校教育（平成29年度～31年度）』
- (2) 栗原慎二・井上弥 『アセスの使い方・活かし方』ほんの森出版 2010.7 p.8、pp.10-11
- (3) 新潟大学教育学部附属新潟小学校 『学

- 級力」で変わる子どもと授業』明治図書
2010.2 pp.39-40
- (4) 清水裕士 『統計分析ソフト HAD』
<https://norimune.net/had>
- (5) H29年度生の1学級において、第3回のア
セス不実施のため、実際の生徒数と回答数
が異なっている。
- (6) AISES 公益社団法人学校教育開発研究所
『アセス対応』
https://aises.info/survey_assess/
- (7) 加藤弘通・大久保智生 『学校の荒れの
収束過程と生徒指導の変化』
[file:///C:/Users/mayumi%20saito/Desktop/r2.8
%20%E6%95%99%E8%82%B2%E8%AB%96
%E6%96%87/57_4_466.pdf](file:///C:/Users/mayumi%20saito/Desktop/r2.8%20%E6%95%99%E8%82%B2%E8%AB%96%E6%96%87/57_4_466.pdf)
- (8) 河村茂雄 『データが語る①学校の課題
』 図書文化社 2007.2 pp.96-97、 p.107